

秋思の詩篇

丞相年を度つて 幾ばくか楽思せる
 今宵物に触れて 自然に悲しむ
 声寒き絡緯 風の吹くところ
 葉の落つる梧桐 雨の打つ時
 君は春秋に富み 臣は漸く老いたり
 恩は涯岸無くして 報ゆる尚遅し
 知らず此れの意 何が安慰せん
 酒を飲み琴を聞き 又詩を詠ず

右大臣を拝命して歳月が過ぎましたが、
 どれほどの楽しい思いが出来たでしょうか、

(忙しくそんな余裕は無かったの意)

今宵は秋の風情に触れ、物悲しく思っています
 風が吹けばコオロギが寂しげな声で鳴き
 雨が降れば梧桐が葉を散らせます

帝はお若いのに、私はだんだん年老いていきます
 御恩は限りませんが、それにお応えするには
 (年齢的に遅いのです)

この気持をどうやって慰めるのか、わかりません。
 (せめて白居易のように)
 酒を飲み琴を聞き、さらに詩を詠みましょう。

右の漢詩は、当宮のご祭神である天神さまと菅原道真公が、昌泰三年(九〇〇)の九月十日に詠まれた「九日後朝同賦秋思応制」という詩で、短縮して「秋思(しゅうし)」ともいわれます。

ご自身の老いと、秋を掛けて、物悲しさを謳う内容で、詩韻にも優れた名作といわれ、その出来栄えに感動された醍醐天皇は、ご自身の御衣を道真公にお授けになられるほどでした。

しかし、この詩を更に有名にしたのが、道真公が翌年、無実の罪で九州大宰府へと左遷された際、同月同日に詠まれた「去年の今夜清涼殿に待す秋思の詩篇獨断腸」から始まる「九月十日」の詩で、この詩で詠まれる秋思の詩篇というのが、まさにこの漢詩のことです。

道真公の漢詩は、物悲しさをどうとうと詠つたものが多いですが、それを悲嘆に落とすのではなく、美しい音韻で結び、幽玄の芸術へと昇華されています。こうした道真公の無常観的な哀愁を見つめる心が、後の「ものあはれ」の一つの原点ともいわれています。

近年のコロナ禍で、心の疲弊が大きいといわれる昨今、この芸術の秋に、道真公に倣い、思いを漢詩や和歌、俳句、また短歌などの詩に託して、心の整理をされてみては如何でしょうか。

コロナ禍 御旅社の社務について

先般から猛威をふるっております新型コロナウイルスですが、今号執筆時点におきましては、感染者数の高止まりが続いております。

今のところ蔓延防止等重点措置などの規制が発出されていないことから、茶屋町の御旅社の社務につきましては従来通り土日午後一時〜五時で授与所のお受付、それ以外の日はその時々とさせて頂き、御朱印も御朱印帳への直書きの方大丈夫でございます。

もし今後の状況により、対応変更の場合は、当宮のツイッターにてご案内させていただきます。

御本社東面 玉垣追加募集について

神山町に鎮座します当宮御本社の東面に、昨年、嵯峨天皇行幸一千二百年、今上陛下御即位記念として、玉垣を建立しましたが、残柱分につきましてご奉納の追加募集しております。

ご希望の方は、本殿前か、東門(裏門)掲示板横にあります申込書でお申し込み下さいませ。

今月の暦

【御旅社授与所茶屋町】御朱印平日受付日
 九月二十二日(木) 十三時〜十七時の予定

【祭礼】

北野祭 遷様式(四日)：京都北野天満宮例祭を遷拝
 嵯峨天皇御降誕祭(七日)：嵯峨天皇さまの御誕生日
 秋季皇霊祭(廿三日)：神事のみ。祖先崇拝。豊穰祈願

【節供】

重陽の節句(九日)：五節句の一つ。長寿祈念。

【節氣】

白露(八日)：大気が冷え始め、降りた露が白く光る頃
 秋分(廿三日)：昼夜等分の候。秋風が訪れる頃

【雑節】

秋の彼岸(九月廿日〜九月二十六日) お墓参り
 秋の社日(廿二日)：産土神を詣でる。ポケ封じ
 中秋の名月(十日)：秋のお月見。菅家の故事。

【大安】

九月五日、十一日、十七日、廿三日、廿八日

【祝日】

敬老の日(十九日) 秋分の日(廿三日)

【朔望】

上弦(四日)、満月(十日)、下弦(十八日)、朔月(廿六日)

【旬】

【野菜】 秋ナス、蓮根、日本南瓜、里芋、ずいき
 【果物】 柿、梨、葡萄、サクロ
 【魚介類】 秋刀魚、カレイ、カタクチイワシ、赤貝
 【その他】 秋の七草、秋の夜長、スズムシ

網敷天神社 SNS、地図サイト



筆者 網敷天神社 禰宜(御旅社 神主)
 白江 秀知

